詩

島田照世・辰巳友佳子・水沢郁選

知事賞

対話

朝倉圭子(守山市)

細く折れ曲がった坂を 上りきった先
 瑞々しく光を纏う 常緑樹の森に
 その施設はあって
 白い建物の中の パイプベッドの上で
 「人工呼吸器を使っています
 食事は胃ろうです それが何か？」
 という顔で 横たわる
 あなたの両手は 胎児の頃の
 透明な記憶を包み
 二枚貝の精度で 閉じている

あなたの瞳は
 深海色に輝きながら 宇宙を見ている
 瞳の底を 銀色のリュウグウノツカイが
 ゆらりひらりと ゆく
 その漆黒の球体に 光は届かず
 地上に棲む私と
 視線が合うことは 決してないが
 同じ時空に
 共に、
 今、
 存在している
 あなたの 目と手の代わりは
 舌
 生まれたての赤ん坊の
 弱々しくて
 力強い

乳房を吸うかたちの

舌

あなたは この世界を

舌で 見て

舌で 触れ

舌で 感じ

理解する

あらゆる色を映して佇む その瞳孔は

何もかもを 知っていそうで

「人類は どこに向かっていているの？」

と聞くと あなたは

ちろちろちろと 舌を 動かした

そして

惑星の形状をした眼球を

ゆっくり 上に向けてると

にんまりと わらった